九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ツァラトゥストラの動物たち

細川, 亮一
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 教授 : 倫理学・哲学

https://doi.org/10.15017/1160

出版情報：哲學年報. 61, pp.1-27, 2002-03-20. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

ツァラトゥストラの動物たち

細川亮一

「『我欲す』　回復し勝利をおさめた者の賛歌。笑う獅子と鳩の群れ。（一つの試み―それ以上ではない。彼自身と彼の思想）四つの動物たち（賢さを持った誇り―柔和さを持った力）が来る―彼らはお互いに近づく」[1]

一八八三年秋の遺稿においてこのようにニーチェは書いている。ツァラトゥストラの四つの動物たちとは、鷲と蛇、獅子と鳩である。四つの動物たちは「賢さ（蛇）を持った誇り（鷲）」と「柔和さ（鳩）を持った力（獅子）」として表現されている。「鷲と蛇」と「獅子と鳩」はそれぞれ対をなしている。それは「彼自身と彼の思想」を示している。つまり蛇と鳩は永遠回帰の思想（ツァラトゥストラの思想）を形象化しており、鷲と獅子は永遠回帰の思想に対するツァラトゥストラの態度（ツァラトゥストラ自身）を比喩している。さらにその対は地の動物（蛇、獅子）と天の動物（鷲、鳩）という組み合わせであり、地と天という神話的な対となっている。

この四つの動物たちがツァラトゥストラの歩みを導き、『ツァラトゥストラ』という形象の物語の展開を規定している。『ツァラトゥストラ』という物語の最初（「序説」1）において、ツァラトゥストラの動物としての鷲と蛇に言及され、「序説」10で永遠回帰の形象として鷲と蛇が登場する。そして『ツァラトゥストラ』第四部最終章「徴」において獅子と鳩が登場する。『ツァラトゥストラ』という物語を全体として捉えるために、ツァラトゥストラの動物たちに定位しなければならない。

一　導き手としての鷲と蛇

「序説」9においてツァラトゥストラは新しい真理を獲得する。その核心はツァラトゥストラが道化師となろうと決意することにあるが、その決意をしたのは正午であった。「このことをツァラトゥストラが彼の心に語ったのは、太陽が正午に位置した時であった。そのとき彼は訝しげに高みへと目を向けた。何故なら彼は頭上に鳥の鋭い叫びを聞いたからである。すると見よ。一羽の鷲が空に大きな円を描いていた。そしてその鷲に一匹の蛇がぶらさがっていたが、それは獲物のようにでなく、友のようにであった。何故なら蛇は鷲の首に輪を描いて（geringelt）巻き付いていたからである。／『私の動物たちだ』とツァラトゥストラは言って、心から喜んだ。『太陽の下で最も誇り高い動物と太陽の下で最も賢い動物—彼らは偵察に出かけて来たのだ。……私の動物たちが私を導いてくれるように。』」（「序説」10）

ツァラトゥストラは「私の動物たちが私を導いてくれるように」と願っている。『ツァラトゥストラ』はツァラトゥストラの動物たちが彼を導く物語である。[2] しかしどこに導くのか。第三部「回復する者」2においてツァラトゥストラの動物である蛇と鷲は言う。「あなたの動物たちは、おお、ツァラトゥストラよ、あなたが誰であり、誰にならなければならないかをよく知っている。見よ、あなたは永遠回帰の教師なのだ。それが今やあなたの運命なのだ。」ツァラトゥストラの動物たちが彼を導くとしたら、それは永遠回帰の教師へと導くのでなければならない。動物たちがそれへと導くテロスは「序説」10においてはっきり示されている。

ツァラトゥストラが「私の動物たちが私を導いてくれるように」と願ったのは、「太陽が正午に位置していた時」であった。そして彼の動物たちの姿が「蛇は鷲の首に輪を描いて（geringelt）巻き付いていた」とされている。このことは『ツァラトゥストラ』の最初の構想「正午と永遠性」へと導く。「正午と永遠性」は具体的な形象として次

のように表現されている。「認識の太陽がふたたび正午に位置している。そして永遠性の蛇がその光のうちで輪を描いて横たわっている。お前たちの時が来た、お前たち正午の兄弟よ。[3]」「お前たち正午の兄弟」としての蛇と鷲がツァラトゥストラを導くのである。その導きのテロスは「正午と永遠性」、つまり大いなる正午において永遠回帰の思想を告知することである。つまり蛇と鷲はツァラトゥストラが永遠回帰の教師となることへ導くのである。

「蛇は鷲の首に輪を描いて（geringelt）巻き付いていた」という表現は、「輪を描く」という言葉によって、「永遠性の蛇」、つまり永遠回帰の思想を形象化している。その首に蛇が輪を描いて巻き付いている鷲は「空に大きな円を描いていた」。この円もまた永遠回帰の思想に関係している。しかし永遠回帰の思想そのものでなく、永遠回帰の思想に対するツァラトゥストラの姿を比喩していると理解すべきである。[4] 鷲と蛇は一つの対をなし、「賢さ（蛇）を持った誇り（鷲）」、「彼自身と彼の思想」を示している。蛇はツァラトゥストラの思想（永遠回帰の思想）を、そして鷲はツァラトゥストラ自身（永遠回帰の思想に対するツァラトゥストラの態度）を言い表しているのである。鷲は鷲の勇気として永遠回帰の思想を直視するツァラトゥストラの勇気を意味するだろう（三）。

鷲と蛇の関係は「鷲に一匹の蛇がぶらさがっていたが、それは獲物のようにでなく、友のようにであった」とされている。それは鷲の勇気によって永遠回帰の思想の否定面が克服され、肯定的な永遠回帰の思想として蛇が見られているからである。それはツァラトゥストラが目指すべきあり方である。鷲と蛇のこの姿はツァラトゥストラのあるべき姿を予示している。第四部「挨拶」において「賢い蛇は鷲の首に巻き付いていた」と語られている。これはすでに永遠回帰の否定面を克服したツァラトゥストラの姿を形象化している。そしてツァラトゥストラのこの姿は、第四部「学」において「鷲の翼と蛇の賢さを持った人間の勇気」として語られることになる。

ツァラトゥストラの動物たちは永遠回帰の教師へと彼を導く。蛇の賢さは永遠回帰の思想を認識することであり、鷲の翼は深淵としての永遠回帰の思想を肯定（光の深淵）へと転化させる飛翔性を示している。否定を肯定へと転じ

るのは勇気であり、それは鷲の勇気である。

少し先走りすぎたが、『ツァラトゥストラ』という物語を全体として捉えるために、ツァラトゥストラの動物たちに定位しなければならない。ツァラトゥストラを彼の動物たちが導くように、我々もツァラトゥストラの動物たちを導きの糸とすることができる。ツァラトゥストラの動物たちは『ツァラトゥストラ』の解読のための手引きなのである。ツァラトゥストラの動物たちは彼を永遠回帰の教師へと導く。しかしそれはいかにしてなのか。その導きの具体的なあり方を明らかにしなければならない。

二　最高の殺害者としての勇気

永遠回帰の思想が表立って語られるのは、第三部「幻影と謎」においてである。そこで重さの霊である小人との対決と牧人の幻影が語られている。小人との対決の前に勇気が語られ、牧人の喉に這い込む黒い重い蛇が登場する。牧人が黒い重い蛇をかみ切ることは永遠回帰の否定面を克服するという幻影である。ツァラトゥストラの動物たちが彼を永遠回帰の教師へと導くのであるとすれば、まさにここでこそ彼を導いているのでなければならない。永遠回帰の思想との対決を可能にするのは勇気であるが、それはツァラトゥストラの動物である鷲の勇気である。そして永遠回帰の思想の否定面の形象である黒い重い蛇は、ツァラトゥストラの動物である蛇なのである。黒い重い蛇については後で論じるとして（四）、まず鷲の勇気について考察しよう。

小人との対決はツァラトゥストラのうちにある勇気によって可能となる。「しかし私のうちに、私が勇気と呼ぶ或るものが存在する。それは今までに私のあらゆる不満を殺害した。この勇気がついに私を立ち止まらせ、『小人よ、お前か、あるいは私か』と言うように命じたのだ。」（「幻影と謎」1）永遠回帰が初めてはっきり語られ、それとの対決が開始される「幻影と謎」において、勇気が語られるのは偶然ではない。この勇気こそが、永遠回帰の思想をめ

ぐる戦いを可能にし、導くのである。勇気は次のように語られる。

「勇気は最高の殺害者である、攻撃する勇気は。何故ならあらゆる攻撃のうちに鳴り響く楽曲があるからだ。／しかし人間は最も勇気ある動物である。従って人間はあらゆる動物を克服した。鳴り響く楽曲によって人間はさらにあらゆる苦痛を克服した。しかし人間の苦痛は最も深い苦痛である。／人間は深淵に臨んだ目まいをも殺害する。人間が深淵に臨まないところがどこにあるだろうか。見ることがそれ自身深淵を見ることではないか。／勇気は最高の殺害者である。勇気は同情をも殺害する。同情は最も深い深淵である。人間が生を深く見れば、それだけ深く人間はまた苦悩を見るのだ。／しかし勇気は最高の殺害者である、攻撃する勇気は。勇気はさらに死を殺害する。何故なら勇気は『これが生であったか。よし、もう一度』と語るからである。」（「幻影と謎」1）

「勇気は最高の殺害者である」という言葉が三度語られ、「勇気は殺害する」として、三つのもの（深淵に臨んだ目まい、同情、死）が挙げられている。勇気は殺害者として、目まい、同情、死を殺害する。殺害される三つのものはたまたま挙げられたわけではない。それはすべて永遠回帰の思想との対決、その思想の克服に本質的に関わっているのである。

「深淵に臨んだ目まい」とは何を意味するのか。「深淵」という言葉は「人間は深淵にかけられた一本の綱である」というテーゼに登場する。この深淵とは永遠回帰の思想の否定面（極限のニヒリズム）を意味している。ここでも「深淵」という言葉の核心に、永遠回帰の思想の否定面を読み取ることができるだろう。勇気が永遠回帰の思想という深淵に臨んだ目まいを殺害するとは、深淵を直視する勇気、深淵としての永遠回帰の思想を呼び出し、それを直視し克服することを意味する。深淵を直視する試みは第三部「幻影と謎」において幻影として見られ、第三部「回復する者」においてツァラトゥストラ自身の行為となる。そして第三部の終りをなす「第二の舞踏の歌」と「七つの封印」において一応そのテロスに達する。つまり深淵に臨んだ目まいを殺害する勇気は、第三部全体を導いているので

ある。

勇気はさらに最も深い深淵である同情を殺害する。同情の克服が第四部の主題であることは、第四部のモットーから明らかである。永遠回帰の教師となるためには、その思想の否定面を肯定へと転化させる（深淵に臨んだ目まいを殺害する）ことだけでは十分でなく、永遠回帰の告知によって没落する人々への同情を克服しなければならない。「最も深い深淵」と言われるのは、永遠回帰という深淵を最終的に克服するために、同情の克服を必要とするからである。同情の克服は深淵の最後の克服であり、それ故「最も深い深淵」の殺害である。「生を深く見る」とは最終的に永遠回帰の思想の洞察に至ることであり、その思想は人間にとって苦悩、最大の苦悩となる。永遠回帰の思想の告知はこの苦悩を惹き起こし、その重みは多くの人間を破滅させる。永遠回帰の教師は同情を克服しなければならない。それを可能にするのが、同情を殺害する勇気である。この勇気が第四部でのツァラトゥストラを導く。

では最後の「死を殺害する」とはいかなることなのか。死を殺害することは「これが生であったか。よし、もう一度（Noch einmal）」と語ることである。ツァラトゥストラは第三部において永遠回帰の思想を肯定へと転じ（深淵の殺害）、第四部において同情を克服する（同情の殺害）。そして第四部「酔歌」において、永遠回帰の思想を最終的に肯定する歌を歌う。その歌の名は「もう一度（Noch einmal）」（「酔歌」12）である。この歌を歌いうることはツァラトゥストラが永遠回帰の教師となったことを示している。それ故に次の章、つまり第四部最終章「徴」においてツァラトゥストラの四つの動物たちが一同に会するのである。笑う獅子と鳩の登場は、ツァラトゥストラが永遠回帰の教師となったことの徴である。

目まいを殺害し（永遠回帰の思想を直視し克服する）、同情を殺害することによって、永遠回帰の教えを教えることが可能となる。これはツァラトゥストラが永遠回帰の教師となる歩みである。この歩みのテロスは永遠回帰の教えを教える大いなる正午である。この場面の記述は遺稿に見出される。「決定的瞬間。ツァラトゥストラは祝祭におい

てすべての人々に問う。『お前たちはすべてをもう一度（noch einmal）欲するか』―すべての者は『はい』と言う。／その時彼は幸福のあまり死ぬ。[5]」この場面は第一部最終章「贈る徳」において語られた「一つの希望の子供たちと共に大いなる正午を祝う」祝祭の場面である。永遠回帰の思想の告知とツァラトゥストラの死との結びつきは、第三部「回復する者」2からも明らかである。ツァラトゥストラの動物たちは彼が永遠回帰の告知をする場面を予言している。そこでツァラトゥストラは「今や私は死に、消えさる」と語り始め、永遠回帰の思想を語るとされている。大いなる正午においてツァラトゥストラは永遠回帰の教えを教えるが、彼の問い「お前たちはすべてをもう一度（noch einmal）欲するか」に対して、すべての者が「はい」と言う。これは死を殺害する勇気が「これが生であったか。よし、もう一度（Noch einmal）」と語ることに対応するだろう。[6]

勇気が殺害する三つのもの（目まい、同情、死）はすべて、永遠回帰の教師となる歩みに即して挙げられている。目まい（永遠回帰の思想の直視）－同情（永遠回帰の思想によって破滅する者への同情の克服）－死（大いなる正午を祝う）。しかしツァラトゥストラの歩みを導くこの勇気はツァラトゥストラの動物といかなる関係があるのか。この勇気はツァラトゥストラの動物である鷲の勇気なのである。このことを示さねばならない。

三　鷲の勇気

第四部「高等な人間」2において、ツァラトゥストラは高等な人間たちに、神の死による目まいと深淵を語る。「お前たちの心は目まいがする（schwindlig）のか。お前たちにここで深淵が口を開いているのか。」目まい（schwindlig）と深淵という言葉は、第三部「幻影と謎」における「深淵に臨んだ目まい」（Schwindel an Abgründen）を思い起こさせる。実際「高等な人間」において、ツァラトゥストラは高等な人間たちに「お前たちは勇気を持っているか」と問うのである。この勇気は鷲の勇気である。「……大胆であるのは、恐怖を知り、恐怖を制する者、深淵を見

る者、しかも誇りをもって見る者である。／深淵を見る者、しかも鷲の目によって見る者、鷲の爪によって深淵をつかむ者、こうした者が勇気を持っている。」（「高等な人間」4）「深淵を鷲の目によって見る者、鷲の爪によって深淵をつかむ者」こそが勇気を持っている。これは「深淵に臨んだ目まいを殺害する勇気」である。しかもそれは「誇りをもって深淵を見る者」とされるが、「誇り」という言葉がここで使われていることは、この鷲がツァラトゥストラの動物である鷲であることを示している。本節の冒頭の引用から分かるように、「誇り」はツァラトゥストラの動物である鷲を意味しており、彼の鷲は「太陽の下で最も誇り高い動物」（「序説」10）なのである。

ツァラトゥストラの動物である鷲は、「深淵に臨んだ目まいを殺害する勇気」、つまり永遠回帰の思想という深淵を見る勇気、直視し克服する勇気を意味している。第三部「幻影と謎」において小人との対決を可能にする勇気は、ツァラトゥストラの動物である鷲の勇気なのである。この鷲の勇気は最も深い深淵である同情をも殺害するだろう。

第四部「憂愁の歌」1においてツァラトゥストラは「私の動物たちはどこにいるのか。こちらへ来い、こちらへ来い。私の鷲と私の蛇よ」と呼びかけ、鷲と蛇が現れる。そして「憂愁の歌」3において年老いた魔法使いが「憂愁の歌」を歌う。この歌の中に鷲が登場する。「あるいは、鷲のように、長い間、／長い間じっと深淵をのぞき込み、／自分の深淵をのぞき込む鷲のように。」この「自分の深淵をのぞき込む鷲」が鷲の勇気として語られた「鷲の目によって深淵を見る者」と同じ鷲であることは明らかだろう。憂愁の歌はさらに続く。「おお、いかにその深淵はここで下へ向かって、／下へ、その中へ、／ますます深い深みへと輪を描いていることか。」「深淵が輪を描いている（sich ringeln）」という表現は、「永遠性の蛇が輪を描いている（sich ringeln）」という永遠回帰の思想の形象を想起させる。つまり鷲がのぞき込む深淵は永遠回帰の思想としての深淵を暗示している。そしてその深淵が「ますます深い深みへ輪を描く」ことは、最も深い深淵へと至ることである。「ますます深い深み」は最も深い深淵としての同情を示唆しているだろう。憂愁の歌はさらに続く。

「そのとき、／突然、一直線に、／すばやく飛んで、／小羊たちをめがけて急降下する、／……」鷲が小羊を襲うことはたまたま言われたことではない。第三部「回復する者」2において、ツァラトゥストラの動物である鷲は、七日間横たわっていたツァラトゥストラのために、食べ物を取ってくるが、その中に二匹の小羊が含まれていた。ツァラトゥストラの鷲は彼自身を形象化しているが、ツァラトゥストラは鷲として小羊の肉を好むのである。「私の胃は、恐らく鷲の胃ではないか。何故なら私の胃は小羊の肉を最も好むからだ。」（第三部「重さの霊」1）つまり小羊を襲う鷲はツァラトゥストラの鷲なのである。[7] しかし何故鷲が小羊を襲うのか。それは小羊が「神の小羊」（das Lamm Gottes）としてのイエスを形象化しているからである。[8] そしてキリスト教は同情の宗教である。[9] 鷲が小羊を襲うとは、最も深い深淵としての同情を殺害することを意味する。「深淵がますます深い深みへ輪を描いている」ことは、「輪を描いている」ことにおいて永遠回帰を、そして「ますます深い深み」において最も深い深淵としての同情を示している。そのとき鷲が急降下して襲う小羊はイエスの形象として、同情の宗教であるキリスト教を比喩している。小羊を襲う鷲はツァラトゥストラの動物としての鷲であり、最も深い深淵である同情を殺害する勇気を意味している。

同情の宗教であるキリスト教をここで批判していることは、憂愁の歌が次のように歌うことから明らかである。「人間を神とも／羊とも見たお前は／人間のうちの神を／人間のうちの羊を引き裂き／そして引き裂きながら笑う。」（「憂愁の歌」3）人間のうちの神を引き裂くとはキリスト教の否定を意味する。そして引き裂きながら笑うという残酷さは、同情を越えた笑い、綱渡り師を飛び越えた道化師の笑いである。「これが、これがお前の至福だ／豹と鷲である者の至福だ／詩人と道化である者の至福だ。」（「憂愁の歌」3）綱渡り師を飛び越える道化師（道化）は同情を克服しているのである。それが鷲の至福、道化の至福である。「子羊に襲いかかる鷲」のうちに、同情の克服を読み取ることができる。鷲の勇気は同情をも殺害する。そして道化＝道化師こそが同情を克服する者なのである。

第三部「幻影と謎」1における勇気は「深淵に臨んだ目まい」と「最も深い深淵としての同情」を殺害する。それ

はツァラトゥストラの動物である鷲の勇気である。ツァラトゥストラの鷲は「誇りをもって深淵を見る者、鷲の目によって深淵を見る者、鷲の爪によって深淵をつかむ者」（永遠回帰の思想の直視）であり、「小羊たちをめがけて急降下する鷲」（同情の克服）である。ツァラトゥストラの動物である鷲の導きによって、ツァラトゥストラは永遠回帰の思想の否定面を肯定へと転化し、同情を克服することができる。この二つの課題を果たすことによって、ツァラトゥストラは「もう一度」の歌を歌うこと、そして大いなる正午を迎えることができるのである。

以上でツァラトゥストラの動物である鷲がツァラトゥストラを導いていることの具体的な意味が明らかとなった。しかしツァラトゥストラのもう一つの動物である蛇はいかなる仕方で登場するのか。第三部「幻影と謎」に立ち返ろう。

四　黒い重い蛇

第三部「幻影と謎」において勇気が語られた後に、ツァラトゥストラは小人に語る。「止れ、小人よ。私かお前かだ。しかし私は我々二人のうちでより強い者だ。つまりお前は私の深淵的な思想を知らない。その思想をお前は耐えられないだろう。」（「幻影と謎」2）ツァラトゥストラはこう語り、永遠回帰の思想をめぐって小人と対決する。ツァラトゥストラの鷲の勇気、深淵に臨んだ目まいを殺害する勇気がツァラトゥストラにこのように語らしめる。それは永遠回帰の思想という深淵を直視する勇気である。それ故深淵的な思想としての永遠回帰の思想が初めてツァラトゥストラの口から語り出されたのである。永遠回帰の思想を直視することが重さの霊である小人との対決を可能にする。そして深淵（＝永遠回帰の思想）に臨んだ目まいを殺害することは、牧人の幻影として形象化されて表現されるのである。

ツァラトゥストラは牧人の幻影を見る。「私は若い牧人を見た、彼は身をよじり、息をつまらせ、痙攣し、顔を歪

めていた。彼の口から一匹の黒い重い蛇が垂れ下がっていた。……蛇は喉に這い込み、蛇は喉にかみついたのである。」（「幻影と謎」2）牧人の喉にかみついた「黒い重い蛇」とは何を意味しているのか。「黒い重い蛇」は「最も重い最も黒いもの」と言い換えられている。「このようにすべての最も重い最も黒いものがその喉に這い込むだろう人間とは誰か。」（「幻影と謎」2）つまり「黒い重い蛇」は「最も重い最も黒いもの」として、「最も黒い最も重い蛇」である。「最も重い」という言葉は、永遠回帰の思想を指している。永遠回帰の思想の襲来に関する遺稿においてこの思想は「最も重い認識」とされ、この思想を最初に語る公刊された著作『喜ばしき知』は「最大の重し」と呼んでいる。牧人の幻影に対応する遺稿は次のように言う。「蛇の頭をかみ切る。／我々は、最も重い思想を創造した—今や、最も重い思想がそれにとって軽く至福である存在者を創造しよう。」[10] 永遠回帰の思想は一貫して「最も重い認識」「最も重い思想」とされている。[11] つまり最も重いものとしての重い蛇は永遠回帰の思想を意味する。では「最も黒いもの」としての黒い蛇は何を意味するのか。「最も黒い」という言葉は、ニヒリズムの極限形態、つまり永遠回帰の思想の否定面を言い表している。牧人の喉に這い込んだ「黒い重い蛇」は、「永遠回帰の思想」（重い）の否定面（黒い）の形象である。

しかしツァラトゥストラの動物である蛇も永遠回帰の思想の形象である。黒い重い蛇はツァラトゥストラの蛇といかなる関係にあるのか。ハイデガーは黒い重い蛇をツァラトゥストラの動物である蛇の反対形象としている。「この『黒い重い蛇』は、円を描く鷲の首に輪を描いて掴まり、軽く高みに身を持している蛇に対する反対形象である。この重い蛇は最も陰うつな常に同じもの、要するにニヒリズムの目標・意味のなさ、ニヒリズムそのものである。」（GA 44, 199）しかしこの解釈は正しいのだろうか。

「黒い重い蛇が牧人の喉をかむ」という幻影が語られる第三部「幻影と謎」の次の章「意に反する至福」において、この幻影と同じことが語られる。「ついに私の深淵が動き出し、私の思想が私をかんだ。／ああ、お前、私の思想で

ある深淵的な思想よ。……」黒い重い蛇がかむことが、ここでは「私の深淵」＝「私の思想」がかむこととして語られている。つまり「黒い重い蛇」は「私の深淵」＝「私の思想」である。ツァラトゥストラの動物である蛇は永遠回帰の思想の形象である。とすれば「私（ツァラトゥストラ）の蛇」は「私の深淵」＝「私の思想」としての永遠回帰の思想である。つまり「黒い重い蛇」はツァラトゥストラの動物である。だからこそ「ついに私の深淵が動き出し、私の思想が私をかんだ」と言われるのである。実際ニーチェは遺稿で次のように書いている。「これが私の首を絞めて殺そうとした私の言葉だ。／これが私の喉に這い込んだ私の蛇だ。」[12] ここで語られている「私の喉に這い込んだ私の蛇」が牧人の喉に這い込んだ蛇であることは明らかである。つまり「黒い重い蛇」は「私の蛇」（「私の」が強調）、ツァラトゥストラの動物である蛇なのである。

蛇が牧人の喉にかみついたのを見たツァラトゥストラは、蛇を喉から引き出そうとしたが無駄だった。そのときツァラトゥストラは叫ぶ。「かみつけ、かみつけ、頭をかみ切れ、かみつけ。」（「幻影と謎」2）このように叫び、そして蛇の頭をかみ切ることを可能にするのは、ツァラトゥストラの動物である鷲の勇気、「深淵に臨んだ目まいを殺害する」鷲の勇気である。

蛇は賢さとして、永遠回帰の思想を象徴する。太陽の下で最も賢い蛇が永遠回帰の思想を認識する。ツァラトゥストラの蛇は永遠回帰の思想の形象である。それは最初に深淵、黒い重い蛇として現れる。そして太陽の下で最も誇り高い鷲が永遠回帰の思想（深淵）を直視する勇気を意味する。この勇気が牧人の喉にかみついた蛇をかみ切る。それは永遠回帰の否定面の克服、肯定へと転化させることを意味する。蛇の頭をかみ切った牧人は「光に包まれた者」（ein Umleuchteter）となる。この光は光の深淵、永遠回帰の肯定的な世界である。鷲の勇気によって深淵は光の深淵へと変わるが、それはツァラトゥストラの蛇が「黒い重い蛇」から「光のうちで輪を描く蛇」「永遠性の蛇」へと変容することなのである。「賢さ（蛇）を持った誇り（鷲）」としてのツァラトゥストラこそが永遠回帰の思想の否定面を

肯定へと転化させる。それは最終的に第四部「酔歌」における「快」（「快の絶対的な過剰」）によって可能となる。「快は自分を欲する。快は自分をかむ、快のうちで輪の意志が輪を描く。」（「酔歌」11）快が自分を欲することが、自分をかむこととして表現される。蛇が自分の尾をかむイメージである。[13] つまり快はウロボロスとしての蛇となる。[14] 永遠回帰の蛇は、牧人（ツァラトゥストラ）の喉をかむのでなく、自分の尾をかむ。ツァラトゥストラの蛇は、牧人の喉をかむ黒い重い蛇から自分の尾をかむ蛇、快としてのウロボロスの蛇へと変容する。それは永遠回帰が肯定された姿、「正午と永遠性」における蛇である。「認識の太陽がふたたび正午に位置している。そして永遠性の蛇がその光のうちで輪を描いて横たわっている。お前たちの時が来た、お前たち正午の兄弟よ。[15]」

この「正午と永遠性」というテロスへ向かう歩みを、ツァラトゥストラの動物たち（鷲と蛇）は導いている。鷲の勇気によって永遠回帰を直視し、さらに同情を克服するのは、この大いなる正午を迎え、「もう一度」と生に対して語るためである。しかしツァラトゥストラのこの歩みは第二部最終章「最も静かなる時」で語られた要求を果たすことなのである。

五　テロスとしての獅子と鳩

「『偉大なことを成し遂げることは困難である。しかし一層困難なことは、偉大なことを命令することである。／お前の最も許しがたいことは、お前が力を持っているが、お前が支配することを欲しないことだ。』それに対してツァラトゥストラは答える。『私には命令するための獅子の声が欠けている。』再び「最も静かなる時」はささやくようにツァラトゥストラに語りかける。『嵐をもたらすものは最も静かな言葉である。鳩の足で来る思想が世界を導くのだ。』」（「最も静かなる時」）

第二部最終章において「最も静かなる時」はツァラトゥストラにこのように語っている。「最も静かなる時」の言

葉のうちに、ツァラトゥストラの動物である獅子と鳩が登場している。獅子は「命令するための獅子の声」として、そして鳩は「鳩の足で来る思想」としてである。世界を導く「鳩の足で来る思想」とは、ツァラトゥストラの思想である永遠回帰の思想を意味している。「命令するための獅子の声」とは永遠回帰の思想を告知し、その思想によって世界を導き命令するツァラトゥストラ自身のあり方を示している。獅子と鳩は「ツァラトゥストラ自身と彼の思想」を形象化しているのである。

ここで本節の冒頭の引用を想起しよう。ツァラトゥストラの動物は「鷲と蛇」、そして「獅子と鳩」であった。それは「賢さ（蛇）を持った誇り（鷲）」と「柔和さ（鳩）を持った力（獅子）」を意味する。四つの動物は「彼自身と彼の思想」の形象である。つまり鷲と獅子は永遠回帰の思想に対するツァラトゥストラの姿勢（彼自身）の形象であり、蛇と鳩は永遠回帰の思想（彼の思想）の形象である。永遠回帰の思想は蛇から鳩へ、そしてツァラトゥストラ自身は鷲から獅子へと変容する。この変容はツァラトゥストラの成長によって可能となる。つまり獅子と鳩はツァラトゥストラが成熟したことの徴である。[16]

蛇から鳩への永遠回帰の思想の変容は、地の動物である蛇から天の動物である鳩へ、地の重さから天の軽さへの変容である。鳩の柔和さは鳥の飛翔性としての軽さを意味している。これによってツァラトゥストラは「最も重い思想がそれにとって軽く至福である存在者」[17]となる。この変容は鷲の勇気（深淵に臨んだ目まいと同情の殺害）によって可能となる。鷲の飛翔性は地の蛇を天へともたらす。それによって永遠回帰の思想は深淵（地）から光の深淵（天）へと変容する。しかしそれによって鷲の仕事は終り、ツァラトゥストラ自身を比喩する形象は鷲（天）から獅子（地）へと変わる。地の動物である獅子は、永遠回帰の教えを教える力、この思想の告知を通してこの大地を支配するツァラトゥストラ自身の形象である。第四部「酔歌」4において「誰が大地の支配者たるべきか」と問われるが、それは笑う獅子がその完成の徴となるツァラトゥストラ自身である。獅子と鳩が示す「ツァラトゥストラ自身と彼の

思想」は、ツァラトゥストラの歩みのテロスである。

鷲と蛇もまた「ツァラトゥストラ自身と彼の思想」の形象であるが、それは彼のテロスへ向かう歩みを導くものとしてである。それに対して獅子と鳩はツァラトゥストラがそのテロスに到達したことを示す徴、「ツァラトゥストラの時」が来たことを示す徴である。それ故ツァラトゥストラは言うのである。「それを私は今や待っている。何故なら私の時が来たという徴がまず私のもとに来なければならないからである。つまり鳩の群れを伴った笑う獅子が来なければならないからである。」（「新旧の板」1）ツァラトゥストラの時とは彼が大いなる正午を迎えうるまでに成熟した時である。この徴がツァラトゥストラのもとに来るのは、『ツァラトゥストラ』の最終章「徴」においてである。

では徴としての「鳩の群れを伴った笑う獅子」がツァラトゥストラのもとに来るために、ツァラトゥストラは何をしなければならないのか。「最も静かなる時」は次のように語っていた。「偉大なことを成し遂げることは困難である。しかし一層困難なことは、偉大なことを命令することである。」ここに二つ課題が読み取れる。つまり「偉大なことを成し遂げること」と「偉大なことを命令すること」である。ツァラトゥストラが大いなる正午を迎えるために鷲の勇気がなさねばならなかったことを思い出そう。それは深淵に臨んだ目まいを殺害すること、そして同情を殺害することであった。「偉大なことを成し遂げる」とは、永遠回帰の思想を直視し（目まいを殺害し）、それを肯定へと転化することであろう。そして「偉大なことを命令する」とは、他者に永遠回帰の思想を直視することを命令すること、永遠回帰の思想を告知することであろう。そのために同情の克服（同情の殺害）が必要なのである。徴としての「笑う獅子」は同情を超えた笑いを意味している。同情を超えることによって初めて、獅子は命令する力となるのである。『ツァラトゥストラ』と遺稿に即して、この二つの課題をさらに確認しよう。

六　ツァラトゥストラの二つの課題

「ああ、お前、私の思想である深淵的な思想よ。……つねに私にとってお前の重さがすでに十分恐ろしいものであった。しかしいつか私はさらに、お前に上がって来いと呼びかける強さと獅子の声を手に入れねばならない。／私がそのことについて先ず自分を克服してしまったら、そのとき私はまた一層偉大なことについてさらに自分を克服するだろう。そして勝利を私の完成の封印としよう。」

第三部「意に反する至福」においてツァラトゥストラはこのように語っている。ここで二つの克服が語られている。一つは深淵的な思想（永遠回帰の思想）に上がって来いと呼びかけることについての克服、もう一つは一層偉大なことについての克服である。この二つの克服・課題は、「最も静かなる時」が語る二つの課題と対応している。「偉大なことを成し遂げることは困難である。しかし一層困難なことは、偉大なことを命令することである。」「一層偉大なこと」は「偉大なことを命令するという一層困難なこと」に対応するだろう。とすれば「偉大なことを成し遂げる」とは、永遠回帰の思想に上がって来いと呼びかけること、永遠回帰の思想を直視し、克服することを意味する。それは「獅子の声」であるが、第二部「最も静かなる時」においては「命令するための獅子の声」と言われていた。獅子の声は「永遠回帰の思想に上がって来いと呼びかけること」（永遠回帰の思想との対決）であるとともに、「永遠回帰の思想を他者に命令すること」を示している。その命令のために同情の克服が必要であった。とすれば一層偉大なことについて自分を克服するとは、永遠回帰の思想を告知するために必要な「同情の克服」を意味するだろう。その二つの課題を果たすこととしての勝利は、ツァラトゥストラの完成である。「勝利を私の完成の封印としよう」という言葉は遺稿へと導く。

「私がそのことについて先ず自分を克服してしまったら、誰が一体私をなお克服するだろうか。それ故この勝利が

私の完成の封印となるだろう。[18]」この遺稿の言葉は明らかに「意に反する至福」に対応している。「私がそのことについて先ず自分を克服してしまったら、そのとき私はまた一層偉大なことについてさらに自分を克服するだろう。そして勝利を私の完成の封印としよう。」とすれば遺稿からその意味を読み取ることができるだろう。上に引用した遺稿の次の断章を見よう。

「ツァラトゥストラが彼の最大の苦痛に打ち勝ったとき初めて、彼は勝利を賭けて彼の最大の竜と戦うだろう。[19]」ここでもツァラトゥストラがなすべき二つの課題が語られている。「私がそのことについて先ず自分を克服する」ことが「ツァラトゥストラが彼の最大の苦痛に打ち勝つ」ことである。つまりそれは永遠回帰の思想に上がって来いと呼びかけることについての克服である。永遠回帰の思想の否定面を直視することは「最大の苦痛」であろう。第三部「回復する者」においてツァラトゥストラはその克服の課題に立ち向かうが、それは「私の大きな苦痛」(mein großer Schmerz)(「回復する者」2)と呼ばれている。

では「勝利を賭けて最大の竜と戦う」とは何を意味しているのか。同じ一八八三年秋の遺稿に次の断章がある。「第三部はツァラトゥストラの自己克服である。それは超人のための、人類の自己克服の模範である。/そのために道徳の克服が必要である。/お前はお前の友たちを犠牲にする。彼らはそれによって没落するほど十分深い。そして彼らはこの思想を創造したのではない(このことがなお私を支えている)。/これは、ツァラトゥストラの前に立ちはだかる最後の反論、最強の敵である。今やツァラトゥストラは熟した。[20]」ツァラトゥストラの最強の敵は彼の最大の竜と同じであろう。永遠回帰という「この思想」の告知は、その重さに耐えられない者を没落させる。つまりその教えの教師は「友たちを犠牲にする」ことになる。永遠回帰の教えを教えうる者になるために、「道徳の克服」、つまり同情の克服が必要なのである。ツァラトゥストラの最強の敵(=最大の竜)とは同情である。「彼の最大の龍と勝利を賭けて戦う」とは、同情の克服であり、それは道徳との最後の戦いである。この最後の戦いに勝利することによって、

その勝利はツァラトゥストラの完成の封印となる。

「ツァラトゥストラは勝利を賭けて彼の最大の竜と戦う」という仕方で、竜が語られている。この竜は第一部最初の章「三つの変容」における竜、獅子が戦う竜を想起させる。「勝利を賭けて獅子は大きな竜と戦おうとする。」（「三つの変容」）『ツァラトゥストラ』という物語において、ツァラトゥストラは三つの変容における獅子、竜と戦う獅子である。そしてこの竜は『ツァラトゥストラ』において「重さの霊」として登場する。「竜＝重さの霊」を前提にして、二つの課題が『ツァラトゥストラ』第三部、第四部において果たされることを示したい。

すでに論じたように、永遠回帰の思想との対決は第三部「幻影と謎」において、重さの霊としての小人との戦いとして開始される。「上方へ。つまり私の足を下方へ引き寄せ、深淵へと引き寄せる霊に抗して、重さの霊、私の悪魔・不倶戴天の敵に抗して。」（「幻影と謎」1）重さの霊としての小人の思想は「あらゆる投げられた石は落ちなければならない」（「幻影と謎」1）と表現される。それは「大いなる疲労の告知者」としての予言者が語る思想である。「すべては同じことだ、何事もする価値がない、知は窒息させる。」（「回復する者」2）この思想は、ツァラトゥストラを窒息させ、彼の喉に這い込む蛇、黒い重い蛇である。つまり小人（重さの霊）との対決は永遠回帰の思想との対決として遂行される。この戦いを導くのはツァラトゥストラの動物である鷲の勇気、深淵に臨んだ目まいを殺害する勇気である。その戦いは第三部「幻影と謎」に始まり、「回復する者」を通して、第三部最終章「七つの封印」において終わる。永遠回帰の思想を直視するという課題、「偉大なことを成し遂げる」という課題は第三部において果たされる。

第四部の課題が同情の克服にあることは、第四部のモットーから明らかである。しかしそれは重さの霊との戦いなのである。第四部「覚醒」1においてツァラトゥストラは彼の動物たちに語る。「この日は一つの勝利である。彼はすでに後退し、彼は敗走する、重さの霊、私の昔なじみの不倶戴天の敵は。あれほど悪く重く始まったこの日が、何

と善く終わろうとしていることか。」ツァラトゥストラが語っているこの日は、第四部「困窮の叫び」で始まった。そこで「大いなる疲労の告知者」である予言者はツァラトゥストラに言う。「同情だ、おお、ツァラトゥストラよ。私はお前の最後の罪へとお前を誘惑するために来たのだ。」（「困窮の叫び」1）最後の罪としての同情への誘惑とその克服が第四部の主題である。[21] 同情の克服は重さの霊との戦いに勝利することである。その戦いを導くのは、ツァラトゥストラの動物である鷲の勇気、最も深い深淵としての同情を殺害する勇気である。この勝利によってツァラトゥストラは完成する。「私がそのこと（永遠回帰の思想を直視すること）について先ず自分を克服してしまったら（第三部の課題）、そのとき私はまた一層偉大なこと（同情の克服）についてさらに自分を克服するだろう（第四部の課題）。そして勝利を私の完成の封印としよう。」（「意に反する至福」）「勝利を私の完成の封印とする」ことは、獅子としてのツァラトゥストラが彼の敵である竜との戦いに完全に勝利したことを示している。

この二つの課題を果たすことによってツァラトゥストラは完成し、大いなる正午を迎える準備が整う。それ故、第四部最終章「徴」において、鳩の群れを伴った獅子が登場するのである。そこでツァラトゥストラは最後に次のように語る。これが『ツァラトゥストラはこのように語った』における彼の最後の言葉である。「私の苦悩と私の同情――それに何の重要性があろうか。／私は一体幸福を求めているのか。私は私の事業を求めているのだ。／よし、獅子が来た、私の子供たちは近づいている、ツァラトゥストラは熟した。私の時が来た。／これは私の朝だ、私の日が始まる。さあ、上がって来い、上がって来い、お前、大いなる正午よ。」（「徴」）ここで「私の苦悩と私の同情――それに何の重要性があろうか」と語られている。それは「私の苦悩と私の同情」をツァラトゥストラが克服したことを意味している。私の苦悩とは永遠回帰の思想を直視する苦悩、「ツァラトゥストラの最大の苦痛」である。そして私の同情とは最後の罪としての同情である。この二つを克服することによって、ツァラトゥストラは大いなる正午を迎えることができる。大いなる正午において永遠回帰の教師としてその教えを教えることこそが、ツァラトゥストラの事業で

ある。それ故ツァラトゥストラは言うのである。「これは私の朝だ、私の日が始まる。さあ、上がって来い、上がって来い、お前、大いなる正午よ。」

七　我欲す

「『我欲す』　回復し勝利をおさめた者の賛歌。笑う獅子と鳩の群れ。（一つの試み・それ以上ではない。彼自身と彼の思想）四つの動物たち（賢さを持った誇り－柔和さを持った力）が来る—彼らはお互いに近づく。」一八八三年秋のこの断章を引用することから本節の考察は始められた。そして第四部最終章「徴」にまで至った。この「徴」において「四つの動物たち（賢さを持った誇り－柔和さを持った力）が来る—彼らはお互いに近づく」ことが実現する。「徴」においてツァラトゥストラのすべての動物たちが一緒に登場する。集まってきた四つの動物たちを最後に考察しなければならない。

同情の克服を果たし、最後に「もう一度」という名の歌、永遠回帰を欲する歌で終わる長い一日が明ける。三回目の最後の下山をするべく起き上がったツァラトゥストラは語る。「お前、大いなる天体よ、お前、深い幸福な目よ、もしお前が照らす者たちを持たなかったなら、すべてのお前の幸福は何であろうか。」（「徴」）このように「ツァラトゥストラは以前に語ったように語った」が、この言葉はツァラトゥストラが以前に語った言葉、序説で語った最初の言葉である。「お前、大いなる天体よ。もしお前が照らす者たちを持たなかったなら、お前の幸福は何であろうか。」（「序説」1）『ツァラトゥストラ』はその終りにおいて、その始まりを想起させる。『ツァラトゥストラ』という物語は円環をなしている。その始まりを指示するのは、「徴」におけるツァラトゥストラの最初の言葉だけではない。「お前、大いなる天体よ」で始まる言葉を語り終えた場面もまた『ツァラトゥストラ』の序説を想起させるのである。

「このことをツァラトゥストラが彼の心に語ったのは、太陽が昇ったときであった。そのとき彼は訝しげに高みへと目を向けた。何故なら彼は頭上に彼の鷲の鋭い叫びを聞いたからである。『よし』と彼は上に向かって叫んだ。『これは私の心にかない、私に相応しい。私の動物たちが目覚めている。何故なら私が目覚めているからである。／私の鷲は目覚めており、私と同じように太陽に敬意を表している。鷲の爪によって鷲は新しい光をつかもうとしている。お前たちは私の本当の動物たちだ。私はお前たちを愛する。／しかし私には未だ私の本当の人間たちが欠けている。』」（「徴」）この場面は序説10における新しい真理をツァラトゥストラが獲得した場面を想起させる。

「このことをツァラトゥストラが彼の心に語ったのは、太陽が正午に位置した時であった。そのとき彼は訝しげに高みへと目を向けた。何故なら彼は頭上に鳥の鋭い叫びを聞いたからである。すると見よ。一羽の鷲が空に大きな円を描いていた。そしてその鷲に一匹の蛇がぶらさがっていたが、それは獲物のようにでなく、友のようにであった。何故なら蛇は鷲の首に輪を描いて（geringelt）巻き付いていたからである。／『私の動物たちだ』とツァラトゥストラは言って、心から喜んだ。『太陽の下で最も誇り高い動物と太陽の下で最も賢い動物－彼らは偵察に出かけて来たのだ。……私の動物たちが私を導いてくれるように。』」（「序説」10）つまり「徴」においてツァラトゥストラが彼の頭上に見たのは、「一羽の鷲が空に大きな円を描き、その鷲に一匹の蛇がぶらさがっている」ことである。だからツァラトゥストラは「私の動物たちが目覚めている」と複数形で語るのである。そして鷲が描く円と蛇が描く輪は、ツァラトゥストラ自身（鷲の勇気）と彼の思想（永遠回帰の思想としての蛇）を形象化している。序説においてその形象は未だツァラトゥストラのものとなっていなかった。それ故に彼は「私の動物たちが私を導いてくれるように」と願ったのである。しかし鷲と蛇の導きによって「徴」でのツァラトゥストラは熟し、完成した。そのように導いてくれたからこそ、ツァラトゥストラは鷲と蛇を序説のように単に「私の動物たち」と言わずに、「私の本当の動物たち（meine rechten Tiere）」と呼ぶのである。鷲と蛇は「正午の動物たち」として大いなる正午を迎えるところまで

ツァラトゥストラを導いたのである。

しかし「鷲の爪によって鷲は新しい光をつかもうとしている」とはいかなることなのか。ツァラトゥストラの鷲は「深淵を鷲の目によって見る者、鷲の爪によって深淵をつかむ者」（「高等な人間」4）であった。それは深淵という永遠回帰の思想の否定面を直視する勇気を意味していた。しかしここで「鷲の爪によって深淵をつかむ」（mit Adlers-Krallen den Abgrund fassen）が「鷲の爪によって新しい光をつかもうとする」（mit Adlers-Klauen nach dem neuen Lichte greifen）と言い換えられている。鷲の爪によってつかむものが、「深淵」から「新しい光」へと変わっている。鷲の勇気によって深淵（永遠回帰の否定的な世界）は光の深淵（永遠回帰の肯定的な世界）へと変容した。「深淵をつかむ」ことは「光の深淵（新しい光）をつかむ」ことへと変わる。それは私の深淵（ツァラトゥストラの蛇）としての黒い重い蛇が光の深淵（新しい光）としての蛇へと変容したことである。変容した蛇は「正午と永遠性」における「光のうちで蛇が輪を描いて横たわっている」とされる蛇、永遠性の蛇である。

しかしこのことによって、導き手としての鷲と蛇の仕事は終わっている。ツァラトゥストラはもはや序説10のように「私の動物たちが私を導いてくれるように」と言わず、「お前たちは私の本当の動物たちだ。私はお前たちを愛する」と語る。この言葉は導き手としての鷲と蛇がその役割を終えたことを示している。しかしツァラトゥストラは「私には未だ私の本当の人間たちが欠けている」と言う。この「本当の人間たち」、つまりツァラトゥストラの子供たちが近づいていることを示す徴が「鳩の群れを伴った獅子」である。

「『徴が来た』とツァラトゥストラは語り、そして彼の心は変容した。そして実際、彼の前が明るくなったとき、彼の足もとに一匹の黄色い力ある動物が横たわり、その頭を彼の膝にすり寄せ、愛のあまり彼から離れようとしなかった。それは自分のかつての主人を再び見出した犬のようであった。しかし鳩たちがその愛によって熱心であることは獅子に劣らなかった。そして鳩が獅子の鼻の上をかすめて飛ぶたびに、獅子は頭を振り、驚き、そして笑った。

／こうしたすべてのことに対してツァラトゥストラは一言語っただけだった。『私の子供たちは近い、私の子供たちは。』」（「徴」）ここでツァラトゥストラの完成した徴である「鳩の群れを伴った獅子」が登場する。それはツァラトゥストラの子供たちが近いことの徴である。つまりツァラトゥストラが「一つの希望の子供たち」と共に祝う大いなる正午が近いことの徴である。第二部最終章「最も静かなる時」において予示されていたことがここで実現する。鳩は「鳩の足で来る思想」としての永遠回帰の思想を形象化している。地の動物である蛇から天の動物である鳩へと形象が変わることは、深淵（地）から光の深淵（天）へと永遠回帰の世界が変容したことを示す。そしてツァラトゥストラ自身の形象は鷲から獅子へと変わる。[22] 獅子は「命令するための獅子の声」をツァラトゥストラが獲得したことを比喩している。永遠回帰の思想へと関わるツァラトゥストラの姿勢は、鷲の勇気から獅子の命令に変わる。そしてその獅子は笑う。この笑いは重さの霊を完全に克服したことを示している。第一部「読むことと書くこと」においてツァラトゥストラは語っていた。「怒りによってでなく、笑いによって人は殺す。さあ、重さの霊を殺そうではないか。」　笑う獅子の登場は、笑いによって重さの霊（永遠回帰の思想の否定面と同情）（五）を殺したことを示している。

「『我欲す』回復し勝利をおさめた者の賛歌。笑う獅子と鳩の群れ。……」本節の冒頭の引用は「我欲す」という言葉で始まっている。それはいかなる意味なのか。「徴」における笑う獅子と鳩の群れの登場は、ツァラトゥストラが「我欲す」と語りうることの徴である。この「我欲す」は第二部最終章「最も静かなる時」の要求、二つの課題をツァラトゥストラが果たしたことによって可能となった。「最も静かなる時」の要求に対してツァラトゥストラは、最初に「私はそれを語ることを欲しない」と答え、さらにもう一度最後に答える。「しかしついに私は最初に言ったことを言った。『私は欲しない。』」（「最も静かなる時」）「最も静かなる時」の要求に対するツァラトゥストラのその時の態度である「私は欲しない」が、第三部と第四部の歩みによって克服され、その最後においてツァラトゥストラ

は「私は欲する」と言いうるようになる。「最も静かなる時」の要求、二つの課題をツァラトゥストラが果したからである。それによって彼は大いなる正午を迎えうるまでに成熟した。だからこそ『ツァラトゥストラはこのように語った』におけるツァラトゥストラの最後の言葉は大いなる正午を迎える言葉で終わるのである。

「これは私の朝だ、私の日が始まる。さあ、上がって来い、上がって来い、お前、大いなる正午よ。」

註

(1) VII 1, S.634 Herbst 1883 21-2.「最も偉大な結末の瞬間（獅子）。我欲す。」（VII 1, S.548 Herbst 1883 16-64）「我欲す」が強調され、さらに感嘆符が三つも付いている。

(2) 「私の動物たちが私を導いてくれるように」というツァラトゥストラの願い、そして高い評価は第四部に至るまで一貫している。第四部においてもツァラトゥストラは次のように語る。「そして最初にさしあたり私の動物たちと話せ。最も誇り高い動物と最も賢い動物—彼らが我々二人にとって恐らく本当の助言者だろう。」（「最も醜い人間」）「よし、お前は私の動物たちにも会うべきである、私の鷲と蛇に。今日地上に彼らに匹敵する者はいない。」（「自由意志による乞食」）

(3) V 2, S.417 Fruehjahr-Herbst 1881 11-196.

(4) 「1. 鷲と蛇の円と輪は、永遠回帰の円と輪を形象化している。2. 鷲と蛇の本質である誇りと賢さは、永遠回帰の教師の根本態度と知のあり方を形象化している。3. ツァラトゥストラの孤独の動物としての鷲と蛇は、ツァラトゥストラ自身に対する最高の要求を形象化している。」（GA 44, 50, vgl. GA 44, 238）ハイデガーはツァラトゥストラの動物である鷲と蛇を何ら区別せず、このように解釈している。しかし区別しないとすれば、鷲と蛇という二匹の動物が登場する必要などないだろう。鷲と蛇はそれぞれツァラトゥストラ自身の形象（鷲）と彼の思想の形象（蛇）としてはっきり区別しなければならない。それは第三部「幻影と謎」において、鷲の勇気（ツァラトゥストラの態度）と黒い重い蛇（ツァラトゥストラの思想）として区別されているのである。

(5) VII 1, S.635 Herbst 1883 21-3.

(6) 死の殺害は「これが生であったか。よし、もう一度（Noch einmal）」と語る。それは永遠回帰の肯定であり、第四部「酔歌」において、最終的に肯定される。「ツァラトゥストラと共に過ごした一日、一つの祝祭が、大地を愛することを私に教えたのだ。／

『これが—生だったのか』と私は死に対して語ろう、『よし。もう一度。』」（「酔歌」1）

（7）「ともかく私の鷲は、小さい白い羊たちにとって一つの危険であり、猛禽と呼ばれて欲しい。」（VII 1, S.365 Mai-Juni 1883 9-24）

（8）「これと並んで新約聖書の信仰告白定式には、第二の、イエスを神の子羊とする発言の系統がある（ヨハ 1. 29, 36, 1 コリ 5. 7, 1 ペテ 1. 18-19）。……ヨハネ黙示録においては、ほうふられた子羊が勝利者として現れる。」（『聖書大事典』四八〇頁）

（9）「人はキリスト教を同情の宗教と呼ぶ。」（『アンチクリスト』7）「何らかの悪徳より一層有害なものは何か。—すべての出来損ない・弱きものに対する行為の同情—キリスト教。」（『アンチクリスト』2）

（10）VII 1, S.638 Herbst 1883 21-6.

（11）「ハンマーとしての最も重い認識」（VII 1, S.540 Herbst 1883 16-48）。「ハンマーとしての最も重い思想」（VII 2, S.228 Sommer-Herbst 1884 26-298）。「私はお前たちに最も重い思想を与えた。恐らく人類はそれによって没落するだろう」（VII 2, S.281 Sommer-Herbst 1884 27-23）。「永遠回帰。／一つの予言。／第一部。最も重い思想。／第二部。善悪の彼岸。／第三部。人間と超人」（VII 2, S.289 Sommer-Herbst 1884 27-58）。

（12）VII 1, S.607 Herbst 1883 18-39.

（13）「すべての『あった』は再び『ある』となる。過ぎ去ったものはすべての来たるべきものの尾をかむ。」（VII 1, S.141 November 1882-Februar 18834-85）

（14）ウロボロスの蛇は永遠回帰の象徴である。"Never-Ending-Story"の最初で、子供が本を開く。その本の表紙にウロボロスの蛇（Never-Ending の象徴）が描かれている。

（15）V 2, S.417 Fruehjahr-Herbst 1881 11-196.

（16）第二部最終章において「最も静かなる時」は、最後に言う。「おお、ツァラトゥストラよ、お前の果実は熟している、しかしお前はお前の果実にふさわく熟していない。／だからお前は再び孤独へ戻らねばならない。何故ならお前はさらに成熟するべきだからである。」　ツァラトゥストラは「最も静かなる時」の二つの要求を果たすことによって熟し、成熟する。ツァラトゥストラの成熟の徴が獅子と鳩である。「最も静かなる時、ツァラトゥストラよお前は熟している—牝獅子　鳩」（VII 1, S.608 Herbst 1883 18-45）。「最後にツァラトゥストラの第三の動物としての獅子—彼の熟しと成熟の象徴」（VII 1, S.543 Herbst 1883 16-51）。

（17）VII 1, S.638 Herbst 1883 21-6.

(18) VII 1, S.593 Herbst 1883 17-86.

(19) VII 1, S.593 Herbst 1883 17-87.

(20) VII 1, S.548 Herbst 1883 16-65.

(21) 第四部のテーマが同情の克服であることは、第四部のモットー（第二部「同情する者」からの引用）から明らかである。「……そして最近私は悪魔が次の言葉を言うのを聞いた。『神は死んだ。人間に対する同情によって神は死んだのだ。』」さらに『この人を見よ』においてニーチェは書いている。「同情の克服を私は高貴な徳の一つと見なしている。私は『ツァラトゥストラの誘惑』として一つの場面を創作した。そこにおいて大きな困窮の叫びがツァラトゥストラのもとに届き、同情が最後の罪のように彼を襲い、彼を自己から背かせようとする。ここで誘惑に負けないこと、ここでいわゆる無私の行為のうちで働いている多くの低級な近視眼的な衝動から彼の課題の高みを純粋に保つこと、これがツァラトゥストラのような人が受けなければならない試練、恐らく最後の試練である。—力の彼の本来的な証明……」（『この人を見よ』（「なぜ私はかくも賢いのか」4）『ツァラトゥストラの誘惑』は『ツァラトゥストラ』第四部を指している。

(22) 「獅子はツァラトゥストラの両手に落ちた涙をなめた。ツァラトゥストラは心の底から揺り動かされ、彼の心は変わったが、しかし一言も語らなかった。しかし鷲は嫉妬深げに獅子の行動を眺めていたなど、と言われている。」（VII 3, S.79 f. Winter 1884-85 31-21）遺稿は『ツァラトゥストラ』第四部最終章「徴」の場面をこのように描いている。何故鷲が獅子の行動を嫉妬深げに眺めるのか。鷲と獅子はともにツァラトゥストラ自身、彼の姿勢・態度を形象化している。最終章「徴」において、ツァラトゥストラ自身の形象は、鷲から獅子へと変わる。だからこそ「嫉妬深げに」と言われるのである。

ツァラトゥストラの死に関する奇妙な記述が遺稿にある。「すべての人が立ち去ったとき、ツァラトゥストラは蛇に手を差し伸べる。「私の賢さは何を私に助言するのか」—蛇はツァラトゥストラを刺す。鷲は蛇を引き裂き、獅子は鷲にとびかかる。彼の動物たちの戦いを見たとき、ツァラトゥストラは死んだ。」（VII 1, S.539, Herbst 1883 16-45）この戦いはツァラトゥストラの動物たちが彼を導いている仕方を形象化している。私の賢さ（私の蛇）に助言を求めたとき、蛇がツァラトゥストラを刺すのは、永遠回帰の思想（私の蛇）がツァラトゥストラをかむこと、永遠回帰の思想を直視することである。この直視を可能にするのがツァラトゥストラの鷲（鷲の勇気）であり、「鷲が蛇を引き裂く」のは、永遠回帰の否定面を克服する（さらに同情を克服する）ことである。それによってツァラトゥストラ自身の形象は鷲から獅子へと変容する。「獅子が鷲にとびかかる」ことはこの変容を示して

いる。かくしてツァラトゥストラは命令する力を持った獅子として大いなる正午を迎え、永遠回帰の思想を告知し、死ぬのである。